

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院生研究
2006年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	社会学研究科	社会学専攻
指導教員	所属・職名	氏名	
	立教大学社会学部教授	奥村隆 印	
自然・人文の別	自然 ・ 人文	個人・共同の別	個人 ・ 共同 名
研究課題名	宗教とその周辺—暴力と癒しのあいだ		
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	立教大学社会学研究科博士後期課程 2年	橋迫瑞穂 印	
研究組織	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
研究期間	2006	年度	
研究経費	200	千円	

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

1995年のオウム真理教による地下鉄サリン事件は社会に大きな影響を与えた。宗教が暴力を生み出すという理不尽さを社会が目当たりにしたからである。しかし、オウム真理教を生み出した80年代の精神世界の文化は、オウムの影響下で一時衰退を見せたものの、再び流行の兆しを見せている。それが、昨今注目されている「スピリチュアル」ブームである。このブームは単なる一過性のものではなく、80年代の新霊性運動を初めとする精神世界の文化が、時代の流れによって露わになったものだといえることができる。そこで、「スピリチュアル」ブームを皮切りに、オウム真理教前後の精神世界の文化について改めて繊細な議論が必要であると考え、理論と調査の両面からこの問題に取り組んだのが、本研究の概要である。オウムが突きつけた「暴力」は、現代の精神世界でどのような様相を呈しているのだろうか。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[宗教] [「スピリチュアル」ブーム] [「聖」なるもの]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

立教 SFR による研究費により、本研究は以下の成果を上げることができた。本研究はまず、ここ数年注目されるようになった「スピリチュアル」ブームへの接近、調査、検討から出発している。1995 年のオウム真理教による地下鉄サリン事件を初めとする様々な事件は、精神文化のみならず社会に大きな影響を与えた。とくに、宗教は「怖い」「いかがわしい」といった「宗教アレルギー」といってもいい印象を社会に与え、そのため、80 年代の新霊性運動の流れを汲む精神文化そのものが一時、社会から拒絶される事態を引き起こした。オウム真理教が宗教の名の下に引き起こした、残虐で自己中心的な犯罪を省みれば当然の反応であったと考えられる。しかし、2000 年にはいって「スピリチュアル・カウンセラー」を名乗る江原啓之氏が注目され始め、その著作がブーム火付け役となり、「スピリチュアル」ブームと呼ばれる現象が社会に現れるようになった。オウム真理教による「宗教アレルギー」のような反応は社会に

依然としてみることはできるものの、このブームは 30 代、40 代の女性を中心に大きな広がりを見せ、一般女性誌のみならず一般紙や新聞、テレビなどでも大きく取り上げられるようになったのである。

「スピリチュアル」ブームとはその形態を考えると、新しいブームと考えるより、オウムによって一時的に社会に排除されていた精神文化が再興し、社会に現れたものであると捉えた方が正確であろう。しかし、このブームは研究対象として捉えにくい性質のものである。なぜなら、かつての新新宗教ブームなどと異なり、特定の集団を形成することがなく、また「スピリチュアル」それ自体に関しても異なった考え方が並存しているブームだからである。そこで、「スピリチュアル」ブームを捉えるために、スピリチュアル・コンペティション、通称「すぴこん」と呼ばれるイベントを調査した。「すぴこん」とは、2002 年から始まった「スピリチュアルの健全な発展を促すために」おこなわれる、「癒しとスピリチュアルな大見本市」である（「すぴこん」詳細は <http://spicon.org/purpose.html>）。「すぴこん」は現在、ブームに乗る形で拡大を続けており、年内でも全国で 50 回近くの開催を予定している。主催者によれば参加者はこれまで 8 万人を越え、例えば横浜で開催した「すぴこん」では一日の来場者が 2000 人近くにまで達している。

「すぴこん」とは、普段は自身の店を構えていたり、また普段は別の仕事をしている人たちがブースを構え、「すぴこん」のために設定した料金でお客にヒーリングなどを施術する会である。広い会場に机が並べられ、客はそのなかでお目当てのブースや、気が向いたブースを体験できる趣向となっている。ブースは使用料が 1 回 2 万ほどであり、ネットでの申し込みによって振り分けられる。また、それとは別に主催者がスカウトしてきたヒーラーなどがブースを構えている場合もある。料金は 1000 円から 3000 円ほどが相場であり、時間は各ブースや施術する目的によって異なるが、目安としては 15 分前後のものが多い。料金設定がやや高く感じられるが、「スピリチュアル」ブームに関連するヒーリングやリーディングなどを店や個人に頼み、本格的に受けると、1 時間 1 万ほど費用がかかる。人気のヒーラーなどでは 5 万ほど請求されることもある。そのことを考えると、「お試し価格」としては妥当であろう。一方「すぴこん」では、特別会場が設けられており、そこでは無料でミニセミナーやヒーリングミュージック、ガイア・シンフォニーなどが上演されている。主催者によれば入場料の 1500 円と、一回のブース代 3000 円を支払い、楽しむ客が多いとのことである。「すぴこん」の会場は、売られているモノに比べてそれほど奇異な雰囲気ではない。学園祭のような雰囲気であり、そのなかで「オーラ・ソーマ」「過去世リーディング」「オーラ写真」「クリスタル」といった比較的最近目にするようになったものから、「足ツボ」「占い」といったものまで所狭しと並べられている。人気のブースは開場と同時に客が殺到し、予定が埋もれている。こういったブースの情報は、主にソーシャル・ネットワークサービスや、「スピリチュアル」に関心のある知人などを通して交換されている。

「すぴこん」を SFR の資金によってこれまで調査を行ってきた。具体的には、当日の会場スタッフとして働いたり、客として足を運ぶなどの方法によっている。また、重要なのは客としての意識の在りようであると考え、客を中心にインタビューを行ってきた。それによって判ったことは、以下の 3 点にある。まず第一に「すぴこん」は単なる見本市として機能しているだけでなく、客の意識そのものを向上させるため、言い換えれば客の目を肥えさせるために機能している。P・L・バーガーは「宗教の世俗化」の先に「宗教の市場化」を想定していたが、「すぴこん」とは可視化された「宗教の市場」である。このような可視化された市場で、客は比較検討をし、自分の必要とする商品＝宗教を選択することができるのである。このような可視化された「宗教の市場」の体験とは、日本社会の精神文化の歴史にとっておそらく初めてのことでないだろうか。

第二に、このことによって「スピリチュアル」ブームが、あくまで個人に焦点をあてており、集団化、組織化を意図的に避けていることが理解される。重要なのは選択する客の生活や重要としている事柄そのものであって、そこが商品を選ぶ基準となっている。「スピリチュアル」ブームの担い手が、かつての新新宗教ブームと異なり、学生といった若い世代ではなく社会人や主婦層であるのはこのためでもある。

研究成果の概要 つづき

第三は、「すぴこん」における金銭への意識である。第一の理由ですでに述べたように、多少戯画化された印象は拭えないものの、「すぴこん」とは可視化された「宗教の市場」である。そこで金銭の授受、有り体に言えば客が自身にとってお金を払い、購入する価値があるのかどうかを見極めることができるのである。また、金銭が介入することで施術者と客との間に依存関係や権力関係が派生することがなく、客と施術者の関係性が保たれるのである。インタビューを行ったなかでも、施術者側が金銭の介入によって依存関係や馴れ合いに陥ることなく関係性を作る利点を挙げていた。もっとも、客として消費する側には「霊的なものを金銭で売り買いする」ことへの抵抗感が残っており、この点に関してはアンビバレンスな位置を占めていると考えられる。以上の三つの点は、「すぴこん」の特徴だけではなく、「スピリチュアル」ブームそのものにも共通する特徴であるといっていだろう。知人や友人のネットワークを介して情報の交換をし、あくまで自身のための「宗教」を探し出すことが「スピリチュアル」ブームである。自身はその「宗教」のために何か犠牲にすることはなく、没頭する対象として「宗教」を見出さないのである。

この距離感、おそらくオウム真理教のショックから来ていると考えている。「スピリチュアル」ブームを批判する一部の論者からは、「スピリチュアル」ブームとはオウム真理教の社会的なショックを忘れた地点に起こったブームであるとされている。しかし、オウム真理教に関する考えや意見は、思いのほかこれまでのインタビューからしっかり聞き取ることができる。印象的な意見としては、「オウム真理教と同じ性質のものが『スピリチュアル』にも存在することは確かだろう。しかし、それは『スピリチュアル』ごく一部の性質であって、その一部を見て批判するのはアンフェアな印象がある。もっと豊かな可能性が『スピリチュアル』にはあると感じている。」といったものである。こういった意見に現われているオウム真理教への距離が、そのまま「スピリチュアル」ブームに存在する距離感に反映されていると考えられることができよう。オウム真理教のようにならず、精神世界を自身の生活に取り入れる工夫といったものが「スピリチュアル」ブームには読み取ることができる。

以上が、「すぴこん」および「スピリチュアル」ブームの調査によって得られた成果である。この点を踏まえ、理論の観点から検討した。具体的には、M・エリアーデが彼岸と此岸を結ぶものを「橋」としたことを皮切りに、ヨハン・ホイジンガとロジェ・カイヨワによる「遊び」の概念を比較検討しつつ、「聖」なるものへ接近するということの社会的な位置づけについて議論を行っている。ヨハン・ホイジンガによれば「遊び」とは、「聖」なるものへ移行する可能性をもつものである。従って、文化や宗教儀礼、政治やファッションに至るまでさまざまなものの根幹にあるのが「遊び」である。一方、ロジェ・カイヨワはホイジンガによる「遊び」の概念を継承しつつ、「聖」なるものへの接近可能性を否定する。むしろ、「橋」として「遊び」を「遊」ぶことは、近代以降の時代にあってなされないことであり、また、そうであってはならないものなのである。「聖」から切り離された「遊び」こそ、近代の「遊び」として正しい「遊び」なのである。この両者の差異を踏まえて、「スピリチュアル」ブームを捉えると、「スピリチュアル」ブームとは「聖」なるものへの接近可能性を秘めたものとして存在しつつも、そこまで到達しないものとして設定されていることが理解される。ホイジンガによれば「聖」なるものへ到達することは、自己がその根拠を失い、神の「具」であることに他ならない。「スピリチュアル」ブームでは「聖」なるものを志向しつつも、そういった自己を無化することを避けている。ヨハン・ホイジンガが理想とした「遊び」と、ロジェ・カイヨワの想定する「遊び」の長所を取り込んだものこそ「スピリチュアル」ブームなのではないだろうかと結論づけた。

しかし、権力関係に陥らない、依存しないといった関係性はあくまで個人の問題であり、そういった可能性が完全に排除されたわけではない。宗教や宗教の周辺にあるものが必然的に背負うその可能性は、暴力を派生させる可能性すらも保持している。これから先の「スピリチュアル」ブームがどうなっていくのかは、まだ未知数であろう。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

- ①・橋迫瑞穂 「身体性の過剰と解体—オウム真理教の『魅力』とは何か」『立教大学社会学年科年報』、立教大学社会学研究科、14号、2007年
- ・橋迫瑞穂 「『聖』なるものへの『橋』—ホイジンガとカイヨワによる『遊び』概念の再検討」、『ソシオロゴス』、ソシオロゴス編集委員会、NO. 31、2007年 (掲載予定)